

平成 25 年 11 月 29 日

3 度目の冬に「はじめてのボランティア」でもかまわない

復興庁 ボランティア・公益的民間連携班
上席政策調査官 田村太郎

また冬が来ました。東北の被災地ではまもなく、震災から 3 度目の年末年始と「3. 11」を迎えます。みんなが同じ困難に直面した震災直後や、身を寄せ合って避難生活を乗り切り、仮設住宅など次の生活の場への移動など、慌ただしく過ぎた 1 年目。これからの復興に思いを寄せながら新しい近所づきあいが深まった 2 年目も過ぎ、被災地では高台移転や区画整理などの復興計画がようやく固まったところで、工事が始まるまでは目に見える動きがまだ感じられない時期となっています。

震災から日が経つと、被災地以外からの関心も薄れているのではないかと不安な気持ちになるこの時期に、もういちど、復興に臨む被災地の方々に思いを寄せ、地元で被災地を応援できることを考えたり、あるいは東北を訪問してボランティア活動に参加したり、これからでも自分たちにできることを考える機会にして頂ければと思います。

これから丸 3 年を迎える被災地は、さまざまな事情から被災され方々の状況に個人差が出る時期です。災害公営住宅の入居も順次始まっていますが、必要な戸数がそろうにはまだ時間がかかります。新しい住宅に入居できた方がいらっしゃる一方で、まだ仮設住宅での暮らしが続く方もすぐ隣にいらっしゃいます。仮設住宅で新しくできた仲間がひとり、またひとりと引っ越していき、寂しさが募るとおっしゃる方もいらっしゃいます。

住宅だけでなく、商店や被災した事業主の方々のために提供された「仮設商店街」も同様に、他の地域で店舗を再開されたり、来客者の減少などから店を閉める方も出始めています。仮設住宅ができた頃には、全国から多くのボランティアが支援に駆けつけてくれました。仮設商店街にもたくさんの応援の声が寄せられ、バスで買い物に来てくれる人もいました。

しかし今、少しずつ人が減っていく仮設住宅や仮設商店街を訪れる人は、以前ほど多くはなくなりました。

一方で、「震災当時はボランティアに行けなかったので、遅くなったけど、これからは被災地を訪ねてできることをやりたい」という声を、最近よく耳にします。当時高校生だった若者や、仕事や家庭の事情で時間が割けなかったという方、そして、当時は自らの生活がたいへんで他の地域には支援に行けなかったという、東北の方々の声です。

「復興に真剣に取り組む方々との出会いは、応援するつもりで訪ねたこちらの方が元気をもらう」という声は、被災地を訪ねた多くの人から聞く言葉です。3 度目の冬に「はじめてボランティアに行く」ことも、おかしなことではなくて、とても重要なことだと思います。今からでもできること、今だからこそできるボランティアは、まだまだあります。